

2020年度・研究ユニット報告書

「環境と社会に関する地理学的実践」

安食和宏（代表）、中川正、森正人、北川眞也、谷口智雅、朴恵淑

本研究プロジェクトでは、グローバルないしはローカルなスケールにおいて、環境と社会に関する地理学的分析と実践に関する基礎的・応用的研究を進めてきた。また、地理学的な知見を基にした大学教育の方法論についての考察を行った。その概要は以下の通りである。

1. 環境に関する研究として、まず森は、人間と環境、自然との関係性に関する近代的前提を掘り崩すために、人新世についての人文学的研究を進めた。その一つの成果として、2020年12月に東京において、「日本ビデオニュース」というインターネット番組で対談を行った。フィールドにおける活動としては、谷口は、2014年に火山噴火災害が引き起こされた御嶽山南麓の王滝川中流域を対象に、河川水質と流量の動態把握と人為的な影響の把握を行った。そして朴は、エネルギー環境教育を軸として、社会に向けた実践活動を広く展開した。その内容は、三重大学生を対象とした「エネルギー環境教育・オンライン講座」、川越電力館テラ46における「エネルギー環境教育・懇談会」、そして三重大学生と大学教職員を対象とした「エネルギー環境教育・アンケート調査」等である。さらに、地球温暖化防止活動として、三重県・環境省他との協働で「脱炭素アクション！オール三重でCOOL CHOICE」と題したDVDを作成し、発信した。

2. 次に、社会との関わりをテーマとした研究活動としては、北川は、現代の大都市を捉える新たな概念に注目して、マルチチュードと大都市に関する研究を進めた。そして安食は、自らの地域貢献活動の実践を通して（三重県公共事業評価審査委員会の委員長など）、地理学的な視点と知見をいかに現実社会に応用できるかを考察した。

3. そして、大学教育における実践として、2020年11月に、「人文地理学学生による地理・環境研究中間報告会」を開催した。当日は、アジア・オセアニア、アメリカ、ヨーロッパ・地中海研究の学生たち15名がオンラインで（Zoom利用による）公開研究発表を行い、安食、中川、森、北川が地域を越えて合同の指導を実践した。

4. 2020年度に研究メンバーが発表した主な著作は以下の通りである。

・谷口智雅・小野田幸生（2020年）：御嶽山南麓の王滝川中流域における河川環境。「陸の水」、87号、p.45-52.

・朴恵淑（2021年）：『2020年度三重大学・中部電力株式会社協働事業：エネルギー環境教育成果報告書』、79p.

・北川眞也（2021年）：マルチチュードと大都市。横浜国立大学都市科学部編『都市科学事典』、春風社、p.1000-1001.

以上

○研究ユニット名称

サステナブル組織研究会

○メンバー

青木雅生(人文学部・教授) <研究ユニット代表者>

米山哲司(特定非営利活動法人 M ブリッジ・代表理事)

○今年度の活動報告

本研究ユニットにおいて、サステナブルな社会を実現するための組織のあり方や取り組むべきことについて検討をすることを目的としている。営利組織である企業はもちろん非営利組織も行政組織も社会的責任を果たすことが求められるようになってきている中、SDGs(持続可能な開発目標)が国連において採択され、いよいよあらゆる組織が地球環境・社会全体の持続可能性の確保のために、積極的に関与すべき段階にきた。世界だけではなく、日本および各地域においてもその実現を目指すのであれば、営利非営利を問わず検討すべき事柄となったことが、本研究ユニットにおける研究の背景である。

企業などの営利組織、および NPO 法人などの非営利組織のいずれについても、サステナブルな組織のマネジメントについての検討を青木が、SDGs についての社会的認知を広げることについての検討を「SDGs de 地方創生」および「SDGs アウトサイドイン」公認ファシリテーターである米山が担当し、研究を進める。三重という地域において SDGs を進めていく主体となる組織や個人のあり方についてツールを使って理解度を深めていく方法論などを取り込むことによって、社会実装の可能性を高めることを目指している。

今年度は、サステナブルな社会を実現する組織のあり方を検討するためにも、その場づくりが必要であると考え、三重大学北勢サテライトにおいて開催している「北勢地域経営研究会」において、SDGs ワークショップを企画した。同研究会はこの研究ユニットの代表でもある青木が代表となっている。同研究会は、三重県内の中小企業が顧客にも従業員にも「魅力ある企業」となるため、異業者交流も兼ねた若手中小企業経営者を中心とした学習機会の創出を目的としており、昨年度から定例で月 1 回程度開催している。この研究会の一環として、SDGs ワークショップを開催した。国内で起きている課題を SDGs の視点から「なぜ起きているか」理解し「どのように解決していくか」を考えていくために活用されているカードゲーム「SDGs de 地方創生」を用いたワークショップを公認ファシリテーターで本研究ユニットメンバーである米山を講師に 2021 年 3 月 28 日に開催した。SDGs に関する基礎的理解、カードゲームを通じた体験、その振り返りという一連のプロセスを通して学ぶ場の創出である。当日は 23 名の参加者があり、終了後の参加者からのアンケートでは以下のような感想を得ることができ、SDGs を単に知識として学ぶだけではなく、実践につながりうるような形での学びの場となった。

・なんとなく取り組んでいる SDGs ですが、わかりやすい説明と事例(ゲーム)で理解が進みました。

- ・SDGs に対する意識が高まりました。社会のことも考える会社の重要性がわかりました。
- ・意識・目的・社会を知ることによって社会全体が活性化することを体験できてよかったです。
- ・SDGs を表面的な知識ではなく、ワークショップを行うことで深い点から理解できました。

これらの成果を踏まえつつ、次年度以降において、場づくりのための様々な可能性をさらに探っていきたいと考えている。

なお、SDGs ワークショップの様子は、人文学部のホームページおよび北勢サテライトのホームページにてその様子を公開する予定である。

人文学部研究ユニット活動報告

2021年3月

研究ユニット名	ワーク・ライフ・バランスと健康経営の関係についての 実証的検討
研究ユニット代表者氏名 (所属・職名)	岩田一哲 (三重大学人文学部・教授)
他のユニットメンバーの 氏名 (所属・職名)	杉浦裕晃 (愛知大学経済学部・教授)
研究プロジェクトの期間 (2020年度分)	2020年7月～2021年3月
研究プロジェクトの概要及び 活動計画	本ユニットは、ワーク・ライフ・バランスに関心のある杉浦教授と、企業従業員のストレスと健康経営に関心のある代表者岩田の2名で、ワーク・ライフ・バランスと健康経営の関係を検討し、研究成果を学術論文として投稿し、研究成果の公開を促進する。
今年度の活動計画 (更新の場合)	9月、10月に共同研究者の杉浦氏と、Zoomによる研究打ち合わせを行った。科学研究費を用いたアンケート調査の内容の吟味が中心である。また、2月、3月は、12月に行ったアンケート調査の結果をもとに、今後の論文投稿に向けての打ち合わせを行った。現在、健康経営に関する議論についての論文を作成中であり、来年度の早いうちに投稿できるよう進めている。

人文学部研究ユニット活動報告書

申請日： 2021年 3月 23日

研究ユニット名	企業評価と投資効率に関する実証研究
研究ユニット代表者氏名 (所属・職名)	人文学部教授 嶋恵一
他のユニットメンバーの 氏名 (所属・職名)	愛知学院大学経営学部 准教授 千葉賢 日本政策投資銀行設備投資研究所 副所長 中村純一
研究プロジェクトの期間 (年度ごとに更新)	2020年 4月 ～ 2021年 3月
研究プロジェクトの概要と 今年度の活動計画： 研究活動報告：	<p>企業の設備投資の効率性について、財務情報などのマイクロデータを用いて実証分析を行う。関連する数理モデルのレビューと計量経済モデルの探索を継続する。ただし、今年度は遠隔で研究の打ち合わせを行い、投資効率と企業評価に関する分析を継続する。</p> <p>今年度は各メンバーともコロナウィルス対策から所属先の本務に集中せざるをえず、研究の打ち合わせや分担作業を行うことができなかった。</p>

注) 更新時に、研究ユニット代表者、あるいは他のユニットメンバーに変更がある場合は、その点を明記する。